## 3-2　現代の風水師たち──葛藤・疑念・ジレンマ

かつて、風水師は国を導く存在でした。

都市を定め、陵墓を設計し、戦の陣を敷く──そのすべての背後に「氣を読む者」がいたのです。中国では張良、郭璞、劉伯温、日本では天海僧正、安倍晴明、加藤清正、そして徳川家康の都市戦略の陰にも、風水師の影がありました。風水とは“気まぐれな占い”ではなく、国家の命運を担う設計思想であったのです。

ただ、今は人に忘れられて、もはや過去の栄光としか言えない自慢話にすぎません。

そんな歴史を語ったところで、現代の風水師が置かれている立場が変わるわけでもなく、むしろ、「それなのに今は何もできないのか」と、逆に空虚さを感じさせてしまうかもしれません。

現代の風水師たちも、理論を学び、現場を経験し、数多くの処方を重ねています。しかし、その中には、処方の正しさに疑問を抱いてしまう人も少なくありません。

「これで本当に氣が整うのだろうか」

「なぜこの鑑定法で変化が起きないのか」

「吉方位に寝室を移したのに、なぜ病気が治らないのか」

懸命に会得した風水師は、知識はあります。理論もあります。書籍や古典も読み込んでいます。それでも空間がうまく動かないとき、風水師の胸中に芽生えるのは、自分自身への疑念です。自信を持って処方しているつもりでも、内心では「もし効かなかったらどうしよう」と不安が残ります。その不安が無意識のうちに、処方の手を鈍らせてしまうこともあるのです。

つまり──風水の正しさを、風水師自身が完全に確信を持ち切れていない場合があるということです。

処方に迷いがあるとき、風水師をさらに苦しめるのが「商業とのジレンマ」です。風水はサービスであり、依頼を受けて料金をいただく職業です。だからこそ、相手の希望に応じて最善の答えを出さなければなりません。

しかし、その「最善」が本当に“氣を動かす処方”なのかと問われると、明確に答えられないこともあります。

たとえば、依頼者がどうしても南向きの玄関にこだわっている場合、本来は避けるべき方位でも「悪くはないですよ」と和らげて伝えることがあります。配置を大きく変えたがらない人には、なるべく現状を維持したまま調整する方法を提案することもあります。そして「このやり方でも運が上がります」と説明するのです。

本当に、それでいいのでしょうか？

依頼者が安心する処方。

機嫌を損ねない提案。

営業として成り立つサービス。

そのすべてが、「氣を動かす」という風水の本質と食い違ってしまう瞬間があります。

「これでいいのだろうか」と胸の内で問いかけながら、笑顔で結果を説明する風水師は少なくありません。それは誰にでもある迷いであり、医師でも、建築士でも、士業でも、顧客の期待と現実のはざまで葛藤することはあります。

風水師だけが特別なのではないのです。

しかし、氣という目に見えないものを扱うからこそ、処方のごまかしが心に残ります。“氣を整える”ことが目的だったはずが、“不安を取り除く言葉を与える”ことが目的にすり替わってしまうのです。そうなると、処方そのものが「本物の氣」から離れていきます。そして、風水界のジレンマはこれだけにとどまりません。

さらに深刻なのが、「風水を軽く扱う人々」の存在です。

ときどき見かけるのが、占い全般を扱うサロンなどで「風水鑑定できます」と書かれているにもかかわらず、話を聞いてみると内容が非常に表面的なものであるケースです。

「玄関に黄色いものを置くと金運が上がる」

「トイレには盛り塩をしましょう」

「観葉植物を置けば氣が整いますよ」

たしかに、それらがまったくの誤りというわけではありませんが、空間全体の氣の流れを読み解くという本来の風水の文脈とはかけ離れています。それは例えるなら、医師でない人が「風邪にビタミンCがいいらしいですよ」と言って薬を処方しているようなものです。

さらに例を出すと、住宅業界の現場における例です。

ハウスメーカーの営業マンが注文主から「風水的にどうですか？」と尋ねられ、慌てて書店で入門書を買って一晩で読み、翌日には「これは吉方位のリビングです」と説明してしまう。

本人は誠意を尽くしているつもりかもしれませんが、風水とは本来、“氣の構造を読み、理論と場を重ねて診る”高度な判断が求められる技術です。このようなケースが広がれば広がるほど、風水全体の信用が下がってしまうのです。

そして「お手軽風水」を広めてしまったのは、メディアや出版業界です。

残念ながら、現在の出版業界では「本格的に風水を探究した書籍」はなかなか取り上げられません。編集者や出版社の多くは、「読者にわかりやすく」「売れやすい」内容を求める傾向が強く、結果として「トイレに盛り塩」「観葉植物で運気アップ」などのお手軽な内容ばかりが市民権を得てしまっています。もちろん、そうした入門的なアプローチにも一定の意味はありますが、そればかりが前面に出ることで、風水本来の高度な設計思想や理論体系が一般に届かなくなってしまっているのです。

この状況は、風水の信用を損ねる一因ともなっています。

真剣に取り組んでいる風水師や研究者にとっては、大きなジレンマでもあります。「まじめに書かれた風水書が正当に評価されない」──この現実も、風水が社会で再評価されるための大きな壁なのかもしれません。